

古筆切拾塵抄・続（七）

——入札目録の写真から——

小島孝之

はじめに

今回は、入札目録中に古筆切の写真が多く収められているにも関わらず何らかの理由により、ほとんどの写真が『古筆学大成』に転載されずに洩れてしまった、という目録を取り上げてみようと思う。洩れた理由の大部分は、目録所載の図版が不鮮明だからだと推測できるけれども、本連載においては、不鮮明を承知の上で敢えて複写する試みを続けており、翻刻だけでは判断の難しいものに少しでも判断材料を提供しようというささやかな意図によるものであるから、『古筆学大成』以外にも図版がない場合を主にして、積極的に取り上げてみたい。

昭和十年二月八日の『村瀬庸庵愛蔵品入札並売立目録』（名古屋美術倶楽部）、それに昭和十四年三月九日の『村瀬庸庵愛蔵品売立目録』（名古屋美術倶楽部）の二冊である。村瀬庸庵家の入札はこれ以外にも、昭和十六年二月二十日にもあり、十八年にも行われたらしいが、その二回分の目録は手許にない。ともに名古屋美術倶楽部で行われた入札会の目録で、「売立」の部を含むのが名古屋の特徴である。名古屋は尾張徳川家の御膝元のゆえか、茶道も盛んな土地柄のゆえか、道具持ちの旧家やコレクターも多い様子で、入札会も東京・大阪に劣らず盛んであったようである。

一 昭和十年二月八日

『村瀬庸庵愛蔵品入札売立』

村瀬庸庵家の入札会には多くの古筆切が出品されているが、その中には今も現存しているもの、あるいは出版物に図版が掲載されているものも多い。しかし、掲載を上述のように見送られた物もあるので、それらを拾い上げて行こう。

一三 「後醍醐天皇 吉野切 あふとみる 極数々」

『古筆学大成』には积文だけで写真はない。翻刻は『古筆切資料集成巻四』にもあり、伊井春樹氏の研究も備わる。しかし、いずれにも写真はない。実は、大正十四年十一月発行の『ふるか、み(内題は布留鏡)』第二号に、写真が掲載されているのだが、この書物自体が入手困難かつ閲覧困難なので、せっかく図版があるにもかかわらず、『古筆学大成』にすら転載されずにきたのであろう。この『ふるか、み』の写真の方が大きく鮮明なので、そちらを転載する。(図1)

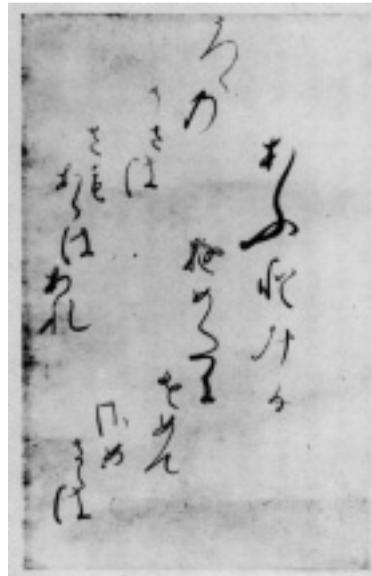


図1 吉野切

翻刻はあちこちにあるが、翻刻も付すべきだとの要望もあるので、付しておく。

あふとみる

うつ、 ゆめたに

の、 せめて

うさは、 さめ

さも、 さらは

あらは

あれ

「吉野切」については、これまで、伊井春樹氏の『堀河百首』初撰本説と、小松茂美氏の散逸『恋部集』断簡説とがある。すでに本連載の(四)で触れた。

一四 「俊頼卿 民部切 すみよしの」

伝源俊頼筆「民部切」古今集の断簡。卷十七、九〇六番和歌九〇九番作者名の部分。『古筆字大成』はこれを大正八年十月二十日の『旧二本松藩主丹羽家並三某家御蔵品入札目録』の写真によって翻刻のみを掲げている。これに対し、『古筆切資料集成巻二』では、右の丹羽家の目録と昭和十四年三月九日の村瀬家目録を挙げて、翻刻を掲げている。十四年の目録の写真の方が鮮明なので、そちらの方を転載する。十四年の目録には、「了任極」という注記があるので、古筆了任の極札が付属していたらしいことを知ることができる。

(図2)

「民部切」は唐紙の剥落のために読めなくなっているものも少なくない。本断簡も多少読みづらい部分があるが、次に翻刻を試みる。

(翻刻)

すみよしのき□のひめまつひとならば

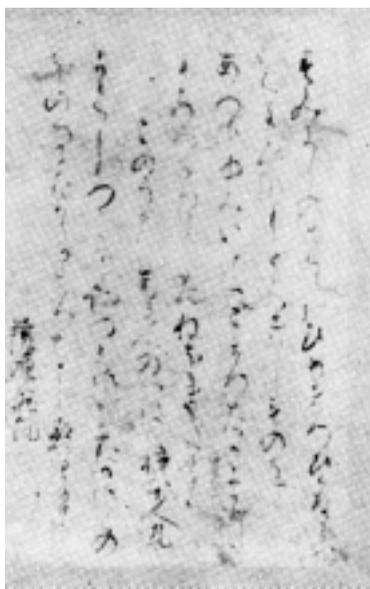


図2 民部切

いくよか[□]へ[□]しと[□]、はましものを
あつさゆみいそ[□]へのこまつたかよに[□]か[□]
よろつよ[□]かねてたねをまきけん
このうたはある人のいはく[□]柿本人丸
かくしつ、[□]よをやつくさ[□]むたかさこの
をのへにたてるまつな[□]なくに

藤原興風

□で囲んだ文字は極めて判読困難な個所。辛うじて読んだが、自信はない。



図3 伝良経筆色紙

一五 「後京極良経卿 小色紙 ありいてぬ 了意極」
見出しにある「ありいてぬ」は「ありはてぬ」の誤読らしいことは分るが、本文の読解は極めて困難。天地に雲形があり、一首三行書きの和歌と思われるが、内容は不明とせざるを得ない。『新編国歌大観』の索引でも該当しそうな和歌を検索することは出来なかつた。不鮮明だが、写真のみ掲げておく。(図3)

一六 「薩摩守忠度 歌切 うちしより」
『清正集』の八三番〜八四番の八行。『古筆学大成』には『呉文炳蒐集手蹟目録』の写真を転載しており、同一物に見えるのだがそちらは九行である。さらに呉家断簡は一行目「返し」の右即ち冒頭に余白はほとんどない状態なのだが、村瀬家の断簡は末尾の八五番の詞書に相当する一行を切り落とし、かつ冒頭の右端に余白がある。これはいったいどういうことであろうか。わざわざ末尾に次の歌の詞書を一行書き足すような必然性は全くないわけだから、その点からも村瀬家の断簡に手を加えて呉家の断簡を作ることとは考えられない。となれば、当該村瀬家の断簡は模写か何かだと考えざるを得ない。なお、呉氏の断簡はその後、昭和五十一年九月の『思文閣墨蹟資料目録』第六十三号に掲載された。参考のために、両者の写真を並べて転載しておく。(図4-1) (図4-2) よくよく見ると、両者の間に、虫食いの穴の位置に相違があるように思われる。

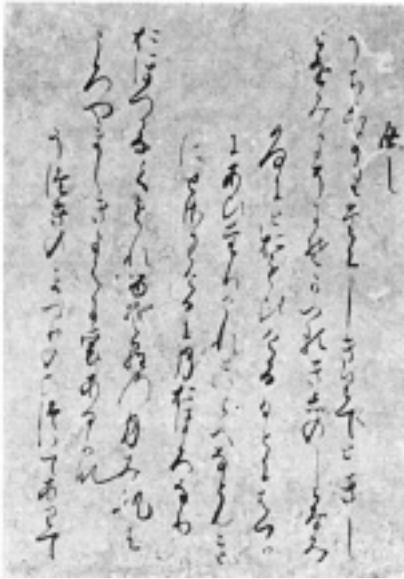


図4-2 清正集切（呉家蔵）

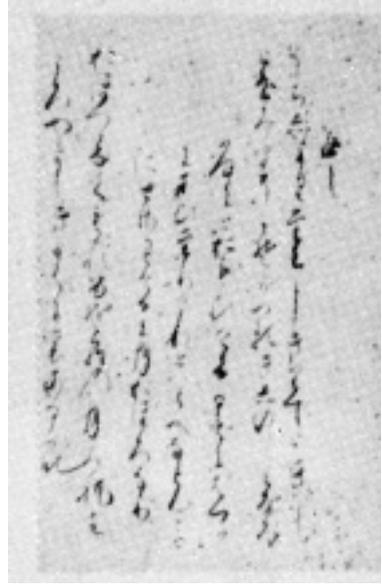


図4-1 清正集切

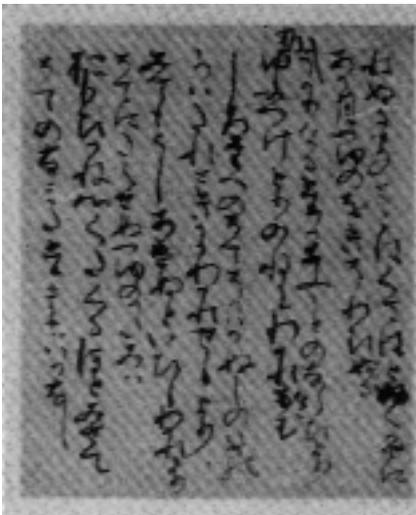


図5 家良集切

一七 「定家卿 色紙 ゆくす衛乃 極数々」
 唐紙に歌一首を書いているらしいが、剥落と写真の不鮮明
 とが重なって、内容をほとんど読み取れないので省略する。
 一八 「定家 五首歌切 ねぬるよの 極数々」
 衣笠家良の家集である。この断簡についてはすでに久保木
 哲夫氏の、『家良集』考―伝定家筆五首切を中心に―とい
 う論文が^(注1)あり、本断簡も翻刻されている。『古筆学大成』『古
 筆切資料集成巻三』にも本文の翻刻は掲げられているので、
 写真のみ掲げておく。(図5)

二八 「俊忠卿 貫之家歌合」

二十卷本歌合のいわゆる「二条切」である。当該歌合は『平安朝歌合大成〔増補〕一』の「三九 天慶二年二月廿八日 貫之歌合」で、本断簡は廿卷本断簡Aとして収められている。萩谷朴氏もこの村瀬家の目録掲載写真によって翻刻している。現在は耕三寺博物館に所蔵されているらしく、『古筆切資料集成巻五』は同館の図録により翻刻をしている。ただ八番歌までしか写真がないらしく、翻刻は八番歌で終わっている。後掲の如く、村瀬家入札目録の段階では十二首あったので、入札の後に分割されたのか、あるいは図録の写真が部分写真であつて一部だけの掲載にとどまっているのかは不明である。『歌合大成』の翻刻は正確無比であるが、漢字を当てたり、補入部分を本文に取り込むなどして読み易く加工してあるから、原状を見られるように写真を転載し、あらためて翻刻をも掲げることにする。(図6)

貫之家歌合

はしめの春

左

しらゆきのみになりなからむめのはな

をりつるほとにはるはきにけり

右

うくひすのすたちしひよりはる／＼と
おもひはねにそまつなかれける

恋 左

ひとしれぬこひのなみたはうくひすのは
つこゑにこそなかれてぬれ

右

いかならんとときかわすれむはるかすみた
ちあるそもきみそこひしき

なかのはる

左

まつたちてすきにしはるはかひもなし
とまるははなものつけからなん

右

さくらはなにほふさかりをみるとき
は心もはるのなかにこそいれ

恋

左

わかこひははるのなかはになりけり

はなのほひにかけやみゆると

右

はるはなほくるしかりけりさくらはない
ろのつきつゝ恋のまされば

はるのはて

左

あたなりとよにいふはなはちらすし
てすきゆくはるそかひなかりける

右

はなもみなおのかちりくはかなきをは
るをみすて、ゆくそかなしき

恋

左

こひといはまついてたちてはるも
みなゆくらんかたもしらすもあるかな

右

としことに花におくる、みにしあれはこ
ひせぬはるのなきそわひしき



図6 二条切「貴之家歌合」

伝後二条院筆の「和漢朗詠集切」は数種知られているが、それらとは別の卷子本でおそらく完本と思われる。写真は上下二巻のそれぞれの部分写真で、上巻は書名と目録から「早春」の和歌までの冒頭部分、下巻は「慶賀」の標題から書名までの巻末部分である。おそらく原本が現存するであろうと考えられるから転載・翻刻とも割愛する。

七六番から「売立之部」となり、以下十一点の古筆関係の懸幅の写真がある。順に見て行くことにしよう。

七六 「後光明院 色紙 雲よ梨も

『続拾遺集』巻二の一〇四番歌一首を散らし書さした色紙である。古筆と称すべきものでもなく、色紙なので省略する。

七七 「後花園院 小色紙 勾当内侍下絵 とことは金葉集立秋

『金葉集』巻三の一五六番歌を書いた色紙である。右と同じ理由で省略する。

七八 「弘法大師 隅寺心経」

伝弘法大師筆の写経の中に一枚の用紙に『般若心経』を書写したものが多数存在し、楷書で書かれたものに「隅寺心経」の名を、特殊な字形を取るものに、鼠の足跡のような字形だという意味で「鼠跡心経」の名を付けて呼ぶ一群がある。本品はこの「隅寺心経」に該当するようであるが、取り立て

て意味のあるものでもないので省略する。

七九 「菅公 北野切」

伝菅原道真筆の写経には、「讚岐切」「河内切」「筑紫切」「紫切」等の名を付けられた古筆切が知られているが、「北野切」なる呼称は管見に入らない。道真が北野天神に祀られたことに因む命名なのだろうが、これも省略に従う。

八〇 「西行 白川切 はることに

伝西行筆「白河切」後撰集巻一の巻末部分である。この断簡は『古筆学大成』が個人蔵として鮮明な写真を掲載しており、ここでは省略する。

八一 「俊成卿 歌切 すへらきの

伝俊成筆『源氏物語』断簡である。見出しに極めがあるとは書かれていないので、「俊成筆」というのが古筆見による鑑定なのか否か不明であるが、不鮮明ながらも、到底俊成の筆跡とは思えない。ところで、伝俊成筆の「源氏物語切」としては、『古筆学大成』にただ一葉、徳川黎明会所蔵手鑑『藁叢』所収の断簡が掲載されている。「東屋」巻の一葉である。他に、小林強氏がこれと同筆のツレの断簡として中村健太郎氏所蔵の同じ「東屋」巻の一葉を記している。(注5)中村氏蔵の一葉は写真がなく比較ができないので暫く措き、『藁叢』

の写真と見比べると、同筆の可能性が高いように見える。本文系統は別本系のやや特異な本文を持つと思われる。小林氏によれば中村氏蔵の一片も別本系だそうである。ツレの可能性があろうかと思われる。(図7)



図7 源氏物語切

(翻刻)

給へり

すへらきのかさしにおるとふち

のはなおよはぬえたにそてかけてけり

うけはりたるそにくきや

よろつ世をかけてにほはんはな

なれはけふをもあかぬいろとこそみれ

又たれとか

君かためおれるかさしはむら

さきのくもにおとらぬはなのけ

しきか

よのつねの色ともみえすくもる

またたちのほりたるふちなみの

はな

八二 「顕輔卿 鶉切 あひみむと」

見出しには「顕輔卿」とあるが、内容は『統後撰集』卷十三、七九六番下句く七九八番上句なので、「鶉切」ではない。

『統後撰集』を写した、伝津守国夏筆「長尾切」が、「鶉切」とまったく同じ料紙に書写されている事を『古筆学大



図8 長尾切

成』が明らかにした。「鶉切」が決して顕輔の筆跡でもなければ、顕輔の時代ですらないことが明らかにされたわけである。筆跡の印象批評が当てにならないことを実証する貴重な例であった。書写時代の推定はやはり相当の誤謬の危険性を孕んでいることを覚悟すべきなのであろう。^(註)

さて、本断簡も、翻刻は『古筆切資料集成巻二』にあるが、写真は未紹介であるから、ここに掲出しておく。(図8)

(翻刻)

〔六〕のむることをたれに見せまし

恋哥の中に

前参議教長

あひみむといつはりに〔六〕にたのめを〔七〕

露のいのちのかゝるはかりに

百首哥よみ侍ける時

殷富門院大輔

たのみけるわかこゝろこそはかなけれ

八三 「家隆卿 中院切 いくかへり 極数々」

伝藤原家隆筆「中院切」千載集の断簡である。巻二、一二七番和歌、一二九番和歌の部分である。『古筆学大成』『古筆切資料集成巻二』ともに翻刻のみを掲げる。(図9)

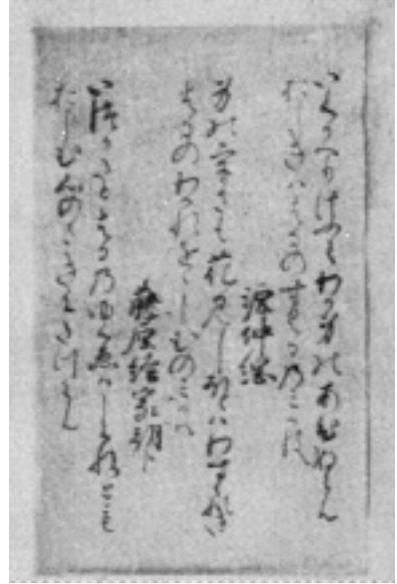


図9 中院切

(翻刻)

いくかへりけふにわか身のあひぬらん
おしきははるのすくるのみかは

源仲綱

身のうさも花見しほとはわすられき
はるのわかれを、しむのみかは

藤原経家朝臣

いつかたとはるのゆくゑはしらねとも
おしむ心のさきにたつらん

八四 「兼好 越前切 からころも」

伝兼好法師筆「越前切」伊勢物語の断簡である。第九段の「東下り」の章段の一節で、『古筆学大成』は本図を複写している。また、『古筆切資料集成巻四』も翻刻を掲載しているの
で、ここでは割愛する。

八五 「寂然 村雲切定家加筆 見つにさへ」

伝寂然筆・定家加筆の「村雲切」貫之集の断簡である。定家自身による書入れのある貴重なもので、多くの断簡が知られている。本断簡は巻二の一〇六〜一〇九番に相当する箇所である。『古筆学大成』には翻刻のみが掲げられており、『古筆切資料集成』には収載されていない。よって、ここに転載しておく。(図10)



図10 村雲切

(翻刻)

みつにさへはるやくるゝとたち返り

いけのふちなみおりつゝそみる

はらへしたるところ

このかにはらへてなかつことのは、

なみのはなにそたくふへらなる

七月ひこほし見るところ

あまのかはよかくきみはわたるとも

人しれすどはおもはさらなむ

をとこのはきのはなみたるところ

おなしえにはなはきけれと秋はきのしたはにわきて心をや

末尾二行は加筆で定家風の文字と見える。村雲切には定家による書入れがあることが知られており、ここも定家による書入れなのであろう。

八六 「兼好 短冊 かくてまた」

兼好の署名入りの和歌短冊である。兼好の真筆とされるものと比較しても似ており、真筆の可能性はあるが、なにせ偽物の多い短冊のことでもあり、真偽のほどは不明としておくべきであろう。(図11)



図11 短冊

(翻刻)

かくてまたふた、ひ御代にたちかへり

あとをいたのめしきしまの道 兼好

これを実際に兼好の歌と仮定すると、「再び御代に立ち返り」とあるから、持明院統から大覚寺統に、または大覚寺統から持明院統へ皇位が戻ったことを言い、「跡追い頼め敷島の道」は先人の例にならって、勅撰集撰進の命を受けることを言うのではないか。それに当てはまりそうなのは、二条為世が再度勅撰集の撰者に任じられ、勅撰集を撰進することになった『続千載集』に関わる動きではなからうか。撰進を祝福する歌であらうか。頼阿の『草庵集』に、

和歌所三首に、寄道祝

かくて又ふかきにかへる我君の

めくみを四方にしきしまのみち

続千載奏覧の後、和歌所にて人々歌よまれしに、おなし心を

しきしまの道もたえせし君か代に

つきて千とせの跡そのこれる

という二首がある。当該短冊の歌とも共通する意識が見える。

であるとすれば、このような特殊なケースを指し示すような歌を偽作するとも考えにくく、この短冊は実際に兼好の自詠自筆の短冊か、または、その模写短冊だったのでなからうか。

以上で、昭和十年の分を終る。

二 昭和十四年三月九日『村瀬庸庵愛蔵品売立』

村瀬庸庵家の二回目の入札会になるが、この時の出品には古筆切はいたって少ない。

六 「俊頼卿 民部切 すみよしの 了任極」

これは、右の昭和十年の入札に出品されたものと同じものである。十年の入札では落札されなかつたのであろう。

七 「俊成卿 四半切 まつある家に 了任極」

藤原俊成筆「日野切」千載集の断簡と思われる。巻十五の、九六〇番詞書く九六一番詞書に相当する十行である。『古筆切資料集成巻二』は「日野切」として翻刻を掲げている。一方、『古筆学大成』は本断簡について一切触れていない。「日野切」は撰者自筆本として比類ない価値を有するのだが、やはり模写や偽物かと思われる物も存在するので、この小さく

不鮮明な写真で「日野切」と断定できるかといえば、いささか難しい。ともあれ、写真を転載しておこう。(図12)

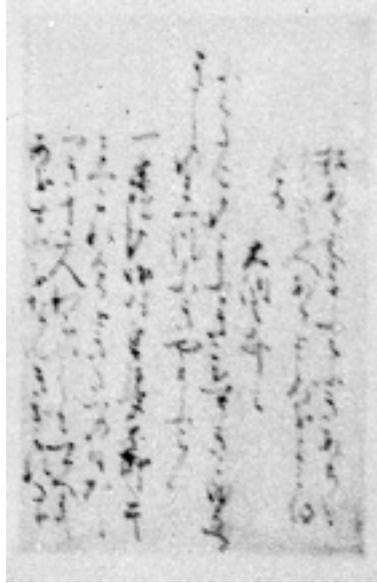


図12 日野切

(翻刻)

松ある家にふえふきあそひ

したる人あるところをよみ侍

ける

大納言齋信

ふえたけのよふかきこゑそきこゆなる

きしのまつ風ふきやそふらん

一条院の御時皇后宮五節たて

まつられけるとききたつの日かし

つき十二人わらばしもつかへまで

あをすりをなんきせられたり

八 「定家郷色紙 ゆくすへの丁任極

これも十年の入札会に出品されたものの再登場である。

九 「西行 消息 恒川了庵極 堅一尺四分/巾一尺八寸五分

散らし書きの仮名消息で、署名はなく、女性的な雰囲気のある流麗な文字であるが、西行の自筆資料と比べても、西行ではあり得ないと思われる。「一日の御返事の、ち／申入たく候つれとも／ふてなど、り候／事いまた／かない候／はて」・・・という書き出しの消息の全文らしいので、全文を讀んでみれば何事かを知ることができるかも知れないが、今は省略したい。ただ、興味を持つ人のために、写真の転載のみ掲げておく。(図13)

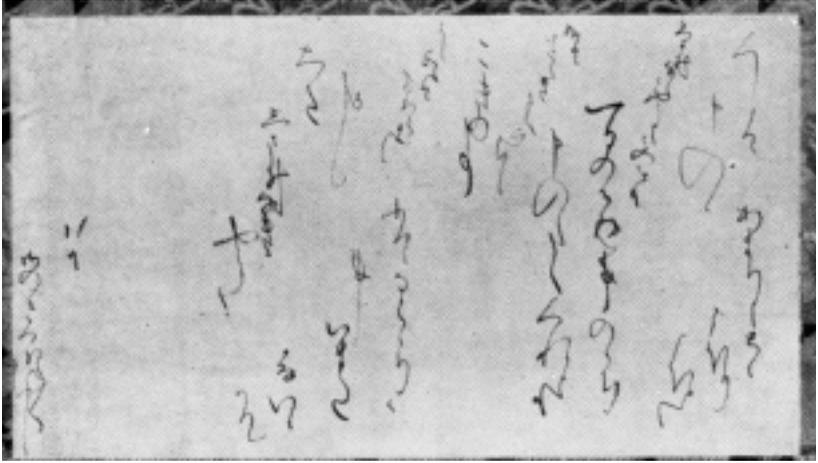


図13 伝西行筆 消息

一〇 「定家卿 記録切極数々 竪一尺二分／巾一尺三十六部」
 かなを主にした文書で、若干解読可能な箇所を讀んでみる
 と、

「仏のかこに茶をやのむ」

「山中の□の月のすみのほる」

「さきの世をしらまほしくもおもふかな」

「梅の尾のちやをのめは地水火風も」

「久しくなりぬ梅の尾の茶をもろとも年にを」

「老の白波立かへる」

「あひきやうをむすふ」

「心をさきに引とめて」などの文言が見える。いずれも和歌の一部らしくも見えるが、『新編国歌大観』『私家集大成』では検出できない。「仏の加護」「先の世」「梅の尾の茶を飲む」「地水火風」などの語句からは、高山寺または明恵上人に関わるものかとも見え、和歌だとすると、明恵の法文歌の一節にも似ている。文字は定家風に見えないこともないが、明恵の夢の記などに通ずる筆跡のようにも見える。はたして何であるのか、ここでは写真の複写のみを掲出し、後日を期し、諸賢の教示を仰ぎたい。(図14)



図14 伝定家筆記録切

十四年の目録では、写真のあるものは以上の五点に過ぎず
巻末に写真のない出品物のリストが「目録」として掲出され
ている。そこには、

- 二六三 慈鎮六半切
- 二六四 二条家^ニ為四半切

- 二六五 飛鳥井雅経四半切
- 二六六 飛鳥井栄雅懐紙
- 二六七 定家ノ文

が並んでいる。この第二回目の入札では、やはり古筆切の出品は極く少数にとどまったのであろう。

なお、第三回目の入札である、昭和十六年二月二十日の『村瀬庸庵愛蔵品売立目録』（名古屋美術倶楽部）をかつて調査したメモには、「後鳥羽院 四半切 歌二首」「後京極良経 四半切」とある。内容については、目録が手許にないので再調査をしないと分らない。

1. 伊井春樹「伝後醍醐天皇筆吉野切考」堀川百首初撰本としての性格」（『語文』第47輯、昭和六十一年四月）
2. 小松茂美『古筆学大成』第十六卷（平成二年六月、講談社）解説。
3. 小島孝之「古筆切拾塵抄・続（四）」（『成城国文学』第27号、平成二十三年三月）
4. 久保木哲夫「『家良集』考―伝定家筆五首切を中心に―」（古筆学研究所編『古筆学のあゆみ』古筆学叢林第五卷、平成七年十二月、八木書店）
5. 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」（『本文研究考証・情報・資料』第6集、平成十六年五月）
6. 書写年代の判定には、やはり科学的な裏付けがほしい。池田和臣氏の続けておられる加速器質量分析法による年代測定は

一つの有力な方法であろう。ただ、まだ容易に使用できる方法ではないし、その判定基準のより正確な設定も今後に俟つところがあるようである。年代測定とは別に、料紙の材質の判定にも主観の交るところがあり、判定する人によるばらつきがある。こちらは、マイクロスコープの進歩により、かなり判定が容易になりつつあるが、まだ一般化していない。これらの点は今後の進展に期待したい。

池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定」『続々』「Ⅲ」(『中央大学文学部紀要』第103・105・107号、平成二十一年三月・二十二年三月・二十三年三月)など参照。

(こじま・たかゆき 成城大学教授)